

令和7年度第1回福島県総合教育会議 議事録（概要）

1 日 時	令和7年8月22日（金）10時30分～12時00分
2 場 所	杉妻会館 3階 「百合」
3 出席者	<p>知 事 内堀 雅雄 教育長 鈴木 竜次 教育委員 吉津 健三 高橋 理里子 平塚 康晴 正木 好男 横田 純子 〈五十音順に掲載〉</p> <p>事例発表者及び随行者 平工業高等学校 青天目 陽向、小山 莉里杏 教諭 平子 雅通 視覚支援学校 岩山 侑生、高原 悠 教諭 熊谷 りつ子、教諭 佐々木 寛太</p>
4 議事内容及び経過	<p>(1) 開会 事務局（政策調査課長）</p> <p>(2) 議題</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p style="text-align: center;">〈 議題1 全国産業教育フェア福島大会推進事業について〉</p> </div> <p>【知事】 議題1、「全国産業教育フェア福島大会推進事業について」、高校教育課及び産業人材育成課からそれぞれ説明をお願いします。 次に、「さんフェア福島2025」の生徒実行委員を務めている高校生の皆さんから、大会の開催に向けた活動内容等を発表していただく。</p> <p style="margin-left: 20px;"> ー 高校教育課長から資料1に基づき説明 ー ー 産業人材育成課長から資料2に基づき説明 ー ー 「さんフェア福島2025」の生徒実行委員から資料3について発表 ー </p> <p>以上の説明及び発表の後、以下のとおり意見交換</p> <p>【知事】 青天目さん、小山さん、岩山さん、高原さん、すばらしい発表だった。 今、4人のすてきなプレゼンを拝見しながら、三つのキーワードを感じた。</p>

一つ目は、「真剣」。

この「さんフェア福島」に対して、今プレゼンをしてくれた皆さん一人一人、そして実行委員会のメンバーが本当に真剣に準備に取り組んでいてくれることをうれしく思う。

二つ目は、「情熱」。

本当に熱い情熱を持って、「さんフェア福島」に向けてしっかりと準備をしてきている。

皆さんの仕事は縁の下の力持ちだが、縁の下にいるという感じがしないくらい、前面に出て頑張ってくれていることに感銘を受けた。

三つ目は、「成功」。

『さんフェア福島』を成功させたい」「是非、多くの方に来てほしい」「参加した方々一人一人が感動を感じてほしい」という思いで頑張っている姿がすばらしい。

それでは、教育委員からコメントや御質問等あればお願いしたい。

【高橋委員】

すばらしいプレゼンテーションだった。

聞き取りやすく、一言一言丁寧に、相手に伝わるよう話すということを意識されていた。

また、合間合間で顔を上げて知事の顔をしっかりと見て、一方通行とせず、しっかりと相手にボールをキャッチしてもらおうとするプレゼンテーションスタイルが本当にすばらしい。感動している。

今、知事から、「真剣」「情熱」「成功」をすごく感じた、という言葉があったが、私は、もう一つ、「福島愛」を感じた。

また、知事から、縁の下の力持ちとして支えてくれているという言葉があったが、この縁の下が一番大事で、建物でいうと土台の部分になる。そこがしっかりしていないと、どんなにすばらしいものを上に載せても、傾いたりバランスが崩れたりしてしまう。

しかし、皆さんが一年間かけて、すばらしい土台を築いているから、ここに様々なすばらしい企画がしっかりと載っている。当日の大成功を確信している。

改めて、青天目さん、小山さん、岩山さん、高原さん、本当にすばらしいプレゼンテーションだった。

ありがとう。

【吉津委員】

発表ありがとう。

プレゼンの中で、岩山さんが言っていた「秘密」を味わってみたい。また、お弁当も味わいながら、見に行きたいという思いを深めた。

今回、14校の28名で実行委員会をつくったということで、本当に大変だったと思う。

これまでの苦労が本番で花開くことを信じているので、最後まで手綱を緩めることなく頑張してほしい。

今回、実行委員会の活動をする中で、自分が専門で勉強してきたこと以外の情報交換や、企業・会社との接触がある中で、いろいろな発見があったと思う。

福島の産業に関する情報が、実行委員会に一番入ってくると思うので、その魅力や、皆さんが感じたこと、考えたことなどを、これから広く友達や仲間に向けて発信していくことにも取り組んでいただけたら幸いである。

本当に素晴らしいプレゼンだった。ありがとう。

【横田委員】

発表ありがとう。

素晴らしい映像と、てきぱきとした発表で、聞いていて本当に感動した。

皆さんの口から「チャレンジ県福島」という言葉を聞いたことが、すごくうれしい。大人もチャレンジするが、できれば学生さんにもチャレンジしてほしい。

実行委員会を開催するのは、大変だったと思うが、この回数をどうやって集まっていたのか。

【青天目陽向】

Zoomなどを利用したオンライン会議や、福島商業高校にリアルで集まるなど、計8回繰り返した。

【横田委員】

こういう努力があって大会が成功すると思うので、最後まで手を抜かずにやっていただきたいと思う。

先ほどの、岩山さんの「秘密」という手法は高等技術であり、これが言えるのは、皆さんが主体性を持ってやっているからである。

「絶対来てほしい」という気持ちがすごく伝わった。私も「秘密」を楽しみに行きたい。

ありがとう。

【平塚委員】

こういった全国大会規模の実行委員会を運営する中で、本当に素晴らしい発表だった。また、8回もの実行委員会を重ねながら大会をつくり上げてきたことは、本当に御苦労だったと思うが、これからの高校生活にすごくプラスになったと思う。

一つだけ教えてほしい。「さんフェア栃木」を見てきた皆さんが、今回の「さんフェア福島」を企画する上で工夫したことを教えてほしい。

【青天目陽向】

来年で震災から15年となる。福島県にとって「震災」は切り離すことができないワードであり、関連する産業や、これまでやってきたことをしっかりと全国に発信できることが、栃木と福島の違いである。栃木から受け継ぐものもあるが、それを吸収し、私たちがもっと良いものをつくっていく、そして次にバトンタッチしていくことを目指して頑張っている。

【平塚委員】

ありがとう。

こうした発言ができる高校生を頼もしく感じる。本当に素晴らしいと思う。

この経験を是非、たくさんの方に伝えていただきたい。自分としても、次のステップになれるよう、努力しなければと思う。

今日はありがとう。

【正木委員】

私は、いわき商工会議所の役員をしており、11月から会頭になる。

今、産業界で何が問題かという点、日本はものづくりの国であるが、ものづくりを根本的に支えている中小零細企業に産業人材が入っていないことである。

そういった中で、全国産業教育フェアが開催されるということは、私たちにとっても大変良い機会と思っている。

先ほど知事が、「真剣」「情熱」「成功」、それから高橋委員が「福島への愛」とキーワードをお話しされたが、私からは「感謝」。

産業人材育成のために、こういったフェアを開催していただく。さらに、委員長の青天目さん、小山さん、岩山さん、高原さんの4名の代表の委員の方がおられるが、指導されている平子先生、熊谷先生、佐々木先生にも、御礼を申し上げたい。そういった意味で「感謝」である。

産業界にとっては、こういったフェアは非常に勇気づけられる。

皆さんの発表は、「無」から「有」を生むもの。その「有」が無限に広がることを祈っている。

ありがとう。

【知事】

続いて、教育長、お願いします。

【教育長】

実行委員会の青天目さん、小山さん、岩山さん、高原さん、発表ありがとう。すごく分かりやすい発表だった。

今回の、「産業から変わる福島の未来～エールで咲かそう福島の華～」というキャッチコピーもすばらしいし、ポスターも、専門科目がやること、発表することの全てが込められており、分かりやすく、良いポスターである。また、真ん中の赤べこがすごくかわいいと思う。

今回の大会の基本理念を三つの「C」で表していた。

「課題に果敢に『チャレンジ』する高校生の姿を発信」、そして、「地域や産業界と『連携』し、地域産業のすばらしさを体感」、さらに「新たな技術や方法、価値の『創造』を発信」。この三つを大事にし、是非、来てくださる方々、そして全国に向けて堂々と発信してほしい。

今回、農業、工業、商業、水産、家庭、看護、福祉、情報、総合学科、特別支援学校において、皆さんが専門教育をどのように学んでいるのか、その成果を発信できる、一度に見られることは本当に貴重な機会である。

私も、皆さんがどういったことを学んできたのか、その成果を、実際に見て、体感したいと思っている。

非常に楽しみにしている。大会の成功に向けて頑張ってもらいたい。

ありがとう。

【知事】

今日は、総合教育会議の委員一人一人が、一段と良い顔で、感動を心に置いて、代表して来られた4人の高校生だけでなく他のメンバーにも一生懸命エールを送ってくれた。是非、この思いをメンバーに伝えてほしい。いよいよラストパート。みんなで力を合わせて頑張ってもらいたい。

最後に、私からのエールはたった一つ、楽しんでほしい。

「エンジョイ、さんフェア」

そこに成功が必ずある。頑張ってください。

< 議題2 ふくしまならではの学びについて >

【知事】

それでは、議題2「ふくしまならではの学び」に移る。

こども・青少年政策課及び義務教育課から、それぞれ説明をお願いします。

－ こども・青少年政策課長から資料4に基づき説明 －

－ 義務教育課長から資料5に基づき説明 －

以上の説明の後、以下のとおり意見交換

【知事】

それでは、意見交換に入りたい。

【正木委員】

今、義務教育課長から、義務段階における子どもの姿のキーワードの説明があった。

全くそのとおりだと思うが、具体的な部分で、説明させてほしい。

私は、いわきアカデミア推進協議会の会長という立場で、10年前から、いわき地区において、小学生に向けた取組として一つの事業を行っている。

この「いわきの会社発見ガイドブック」は、昨年までは小学5年生に小冊子を配っていた。

昨今はタブレット方式になったため、今年からPDFで実施しており、その内容がどのようなものか、参考に一部を説明させていただきたい。

まず、いわきアカデミアとは何か。一つの目標として、小学生は、いわきを知って、いわきを好きになってほしい。中学生は、いわきで働く人と一緒に考えて話し合ってみよう。高校生は、いわきを離れても、ずっといわきとつながる人になってほしい。大学生は、いわきで働く、いわきを支える人になってほしい。

このとおりになるかどうかは別として、いわきの文化の中の産業、特に地域にどのような企業が存在しているのかを知ることが、このガイドブックの持つ意味合いである。

「自然・環境・エネルギー」、「科学技術・ものづくり」、「スポーツ・医療・福祉」、「ファッション」、「金融」、「建設」、「販売」、「観光」、こういった八つの大きな分野から、小学5年生が興味関心のある分野を自分で選ぶ。例えば、「自然・環境・エネルギー」をクリックすると、関連する企業が表示される。

また、そこをクリックすると、企業のホームページにつながる仕掛けになっており、これは、生徒はもちろん、先生も見ることができる。

そして、総合学習の中で、「こういった学習をしたい」、「こういった企業に連れて行って」といった場合には、公民館と連携して、いわきアカデミアが中心に事務局となって契約をする。いわき市全体のマップの中に、今、80社ほど記載しているが、今年は更に40社ぐらい増える。

また、今は小学生バージョンとなっているが、これを中学生バージョン、高校生バージョンと、その年代に合わせたものにしていく。

これは、先ほど義務教育課長も説明されたが、地域とのつながりの意識をつくるもの。いわき市は製造品出荷額が仙台市に次いで2位、3位は郡山市と、それだけ優秀な企業が存在しているにもかかわらず、産業人材の育成が非常に難しい状況である。

そのため10年前に、商工会議所の立場から立ち上げて、とにかく子どもた

ちが小さいうちから、いわきの文化の中で、産業の位置づけを示していこうと続けてきたものであり、一例として、申し上げた。

【知事】

いわきアカデミアの10年の歴史は、福島県の中でも先進的である。

3年前から県でも、『感働！ふくしま』プロジェクト」をスタートしたが、そのお手本となっているのが、正に、いわきアカデミアである。

今日この場で改めて御紹介いただいたが、今後、小学生から中高生へと、上の年代に広げていくというトライアルは非常に重要だと思う。

【平塚委員】

「こどもまんなかふくしまの実現に向けて」ということで、子どもが大事なものは十分分かっているが、やはり親にも理解していただくのが非常に重要なのだと思う。

まず親を教育するというのは非常に難しいことであり、それを学んでいただく場は、やはり学校が一番ではないかと思う。

今、多忙化解消のために、様々な学校行事や参観日等を減らしている中で、親が気軽に学校に来られる、そして、学校で子どもの学んでいる姿を見るのも、親として成長していく上で、非常に大事なことである。

そういった少ないチャンスの中でも、学校に来ていただける方にもっともっと学校に来ていただきたい。

学校に来てくれる親御さんは、そんなに問題はない。学校に来ない親にどうやって学校に来てもらうか。

学校や、県でやっている事業などを、いかに学校に来ない親に伝えるかというのは、非常に重要ではないかと思う。

また、「地域と協働した活動の場の設定」の中でも、やはり地域との接点の少なさというか、地方の学校は、周りの企業・団体等の協力が得られやすいと思うが、街中の学校となると、地域の中にしても数少ない状況になってくるため、工夫していかないと難しいと思った。

また、学年が進むと、夢や目標が難しくなることも、やはり自分の夢も探求していかないと、中々見つからないのではないかという思いがある。年齢が重なれば、現実的なこともどんどん分かってきて、小学生の時に思った夢が変わってくることもあると思うが、そうした中で、中学生でも高校生でも、自分の夢を実現するための探求心も養っていかなければならないのではないかと感じた。

【横田委員】

今までの「答えを教える勉強」から、今は、「答えはないという勉強」の仕方

になっていて、探究という時間を使って子どもたちの考える力を深めていこうという、すごく大事なところをやっていると思う。

その中で、このステップで幼稚園、小、中、高というのはすごくいいと思うが、課題解決は大人でもすごく難しいことである。学校の中で、地域の課題や地域の人たちと触れ合っていたときに、解決できればいいが、解決せずに、子どもたちや学生たちの中に、「本当に課題解決になったのかな」という、もやもやを残してはいけないと思っている。成果まで見せられるような取組になれば良いというのが個人的な思いである。

また、海外の話になってしまうが、一番人格形成に大事なのは幼児期と言われており、フィンランドなどでは、幼稚園の先生になるには、大学の更の上の専門科に行く必要があり、給料も一番高くなっている。そのくらいでない幼児期の子どもたちには関わらせられないというくらい、幼児期はすごく大事。その時期を良く過ごすと、幸福感を持ち、地域にも関われる子どもになるというような流れができてくる。

そうすると、福島の子どもたちの幼児期は、今、いろいろ手厚くされているとは思いますが、何か少し見直す機会があれば、小、中とつながっていけるのではないかと思った。

【吉津委員】

親世代は、黒板に書かれたことを必死に覚えて、それをアウトプットする教育を受けてきた世代だと思う。ところが今、学校現場はそうではないということを経にもよく分かっていただくことが、非常に重要だと思っている。

細かい話になるが、資料4のところで、「通っている学校や、学校生活が好き」は4. 15、「自分は心も体も健康であると思う」が4. 14で、「福島県は将来の夢をかなえられる場所だと思う」は3. 56と、一気に落ちており、そこは非常に残念である。また、「学校や地域の中で、地域の方々と一緒に学んだり、活動したりする機会が十分にある」は3. 48で、良いといえば良い数字なのだと思う。ただ、数字だけで判断するのも性急過ぎると思うが、この「福島県は将来の夢をかなえられる場所だと思う」については、個人的には非常に残念である。それが結局、人口減少の要因になっていると思うので、この辺りを重視した取組というか、何か良いアイデアがないものかと考えていた。

そこで、教育庁の行事で、大玉村の子どもの育て方の取組を伺った際に、大玉村では、「〇〇さんの家の子ども」ではなく、「大玉村の子ども」というような取組をしたことが非常に印象に残っている。

そういったところは、「学校や地域の中で、地域の方々と一緒に学んだり、活動したりする機会が十分にある」といったことが大きいのではないかと思う。

私は仕事柄、毎日、人生に困難を抱えた人の相手をしており、その発想からすると、一番最後の資料にある「人生を切り拓くたくましさ」が欠けている方

が多い。

「人生を切り拓くたくましさ、他者との対話、協働」は、社会に出てから重要だと思っている。本当に良い方向性で今後も取り組んでいただきたいし、自分も取り組んでいきたいと思った。

【高橋委員】

先ほど横田委員がおっしゃっていた幼児期について、私はEQの専門家として活動しているが、海外では、SEL（セルフエモショナルラーニング）が非常に発達しており、自分たちで考えて、自分たちでやっていくことで幸福度につながっていく、という考えが進んでいる。

しかし、日本の教育現場では少し弱いように思われ、非認知能力という言葉では大分使われるようにはなったが、そこを意識してやっていくことがすごく重要になってくると感じていた。

現状の課題として、少し数値依存になっていないか。KPI評価というのはすごく大事な部分だと思う一方で、資料を見たときに、幸福度とか自己肯定感が改善しているように見えるが、アンケート数値だけでは施策の実効性を十分に図れていないのではないか。

よって、その成果の結びつけをどう明確化していくかを具体的にし、例えば、学力向上や不登校の減少、地域定着率など、他の施策項目とリンクさせるクロス評価をできないかと感じていた。

また、数値以外に、やはり質的な評価の部分や事例の蓄積、第三者評価なども、この先見ていただくと良いのではないかと感じている。

ただ、この調査自体は、しっかりとした良いデータをつくっていただいていると思っている。

やったことだけを数値だけで評価するのではなく、子ども自身の言葉や体験の変化、地域とのつながりの実感といった質的な面を記録・分析する仕組みというの、今後検討してほしい。

その成果が子どもたちの未来につながり、「福島愛」がもっと強くなる、将来戻ってきてくれるといったところにつながってくれるのではないかと感じた。

【知事】

教育長、お願いします。

【教育長】

資料5について、「ふくしまならではの学びに向けて」、先ほども横田委員、吉津委員、高橋委員からお話があったが、幼児教育の部分は非常に私も大事だと思っている。

こども未来局にいた頃から考えていたが、こども未来局でも、「こども環境学

会」に関わっていただいて、園庭の遊具の配置や中身を工夫するなど、子どもの遊びという点から、社会生活の関わりのある部分であったり、子ども同士の人間的な関係性とか基本的なところの育成に、力を入れていかなければならないと思ってきた。

それが今度は、幼小の接続で義務教育での探究的な学び、地域との関わり合いの中での関係的な学びを通して、中高の接続といったところで高校の教育にもつながっていく。資料にあるように、この体系的な考え方が非常に大事だと思っており、幼児教育センターなどを立ち上げていることから、是非そういうものの中身の充実をしっかりとやっていきたいと思っている。

【知事】

「こどもまんなか福島」をつくろうというのが、今ここにおられる皆さんの共通の思いだと思う。

その際に欠いてはいけない視点、大切にしたい視点が「リスペクト」である。ともすると、大人は子どもを守る、庇護するという上下関係のような見方をしてしまうが、「こどもまんなか社会」の議論をするとき、子どもと我々大人が対等だという感覚はすごく重要だと思う。

我々大人が子どもたちをリスペクトする、尊重する、尊敬する。それがないと、上下関係になったり、一方通行になったり、大人の感覚で物事を定義付けてしまうことがある。それでは本当の「こどもまんなか」にならないと私は思っている。

先ほどお話のあったフィンランドでは、学びを極めた方が幼児教育を行っており、高い報酬をもらっている。彼らがどのように子どもと接しているかという、対等、フラット。一人の人格として向き合うことが本当の付き合い方。日本は上下関係がずっと続いているが、令和の「こどもまんなか」は、まず根っこにお互いのリスペクトがあって始まる。子どもに「大人をリスペクトしろ」と言う前に、まず我々が彼らをリスペクトしているのか。そこから問い直さないといけないのではないかと感じる。

特に、今日、高校生4人のプレゼンを見ていて、私より立派だと思った。すごく良いプレゼンを一生懸命やっている。

我々自身が高校生のことをすごいなと尊敬し、尊重して、彼らのために、大人が何を頑張れるかと真剣に行動すること、これが「こどもまんなか福島」の本質ではないかということ、今日、改めて気付かせていただいた。

< 報告事項 1 ふくしまの未来を担うグローバル人材育成事業について >

【知事】

報告事項 1、「ふくしまの未来を担うグローバル人材育成事業について」、教育総務課長からの報告をお願いします。

－ 教育総務課長から資料 6 について説明 －

【知事】

このグローバル人材育成事業は、説明にもあったとおり、賛同されている企業・団体・個人等、多くの方々からの寄附が非常に重要なポイントになっている。

県内の企業のみならず、県外・国内の企業からも温かい応援を頂いていて、教育長を始め、教育委員会の皆さんの御努力もあるが、相手の方がそれに共感してくれているということは、本当にありがたいと思っている。

改めてこの場を借りて、「ふくしまの未来を担うグローバル人材育成事業」の趣旨に賛同して協力されている全ての方々に、心から敬意と感謝の意を表したい。

今週、この事業とは別に、本宮市の中学生たちとお会いした。全員、先日まで英国に行って、一週間ほど幅の広い体験をしている。

大使館に行って、大使とお話をする、ケンジントン・チェルシーの王室特別区に行って、区長さんたちとお話をする、英語でスピーチをする、自分と同年代の学生たちに、一生懸命自分自身で、日本の文化や本宮がどんなところかということ伝える等、そういった経験をして帰ってきた生徒たちと毎年お会いしているが、帰ってきた後の成長が本当に著しい。

恐らく、我々が一週間行ってもあそこまで変わらないと思う。やはり非日常である海外の経験をして、それに対する準備も頑張ってくれていると思うが、これだけ大きく成長できる場がある。

このグローバル人材育成事業は、それを県全体で後押ししようという事業であるため、今後とも、教育委員会、そして知事部局も連携して、この事業がより広がりを持って、より充実した内容になるよう取り組んでいければと思う。

それでは以上で、本日の議題が全て終了した。

今日は、一段と力の入ったすばらしい御発言を頂き、委員の皆さん、本当にありがとうございます。

(3) 閉会

事務局（政策調査課長）